

高齢者の転倒恐怖感とその関連要因の 新たな概念モデル作成



小林 薫¹⁾ , 野村高弘¹⁾ , 柊 幸伸²⁾

1) 国際医療福祉大学 保健医療学部理学療法学科

2) 了徳寺大学 健康科学部理学療法学科

はじめに

地域在住高齢者の転倒発生率

- ▶ 本邦では1年間に20%前後 (安村, 1999)

転倒恐怖感 (fear of falling)

- ▶ 60%前後という地域が多い (新野, 2010)



なぜ、転倒が怖いのか？

ただ転んだだけ（40-50%）（鈴木,2001）



何らかの外傷や骨折（50-60%）

- ・捻挫、打撲
- ・骨折（5-10%）

そのうち、大腿骨頸部骨折（1-2%）

（Nevitt MC, et al, 1991）



転倒恐怖感

身体能力は残されているが、移動などの活動を避けようとする永続した恐れ。

主要因：転倒の既往

その他：バランス能力，下肢伸展力の低下



しかし、必ずしも転倒経験に関係しないとの報告もある。(Tinetti, 1993)



目的

- ・ 転倒恐怖感は、閉じこもりにつながる潜在的なリスクファクターである。
- ・ 転倒恐怖感は、**転倒経験がない者にも存在する。**
- ・ **転倒という実質的なアクシデント以外の要因が関与？**



1. **運動に対する心理的要因（運動有能感）**が関与しているのではないか？
2. 先行研究では、転倒恐怖感に関与する要因やその影響力のみを検討しており、**各要因がどのように関連しているのか（相互関係）**は明らかにされていない。



対象

地域在住高齢者 53名

(男性30名, 女性23名 : 平均年齢76.1歳)

- 対象者には事前に研究内容を説明し、同意を得た.
- 国際医療福祉大学研究倫理委員会の承認 (14-Io-150) を得ている.



方法

▶ 自記式質問紙の項目

- 過去1年間の転倒歴（少なくとも1回以上）
- 転倒恐怖感の有無
- 成人用運動有能感尺度（運動有能感，運動統制感）
- Motor Fitness Scale（移動性，筋力，平衡性）

▶ 分析方法：パス解析（Amos23.0），有意水準5%

先行研究の知見を統合した従来モデルを仮定し，
これに運動有能感尺度を加えた仮説モデルを作成した。



結果

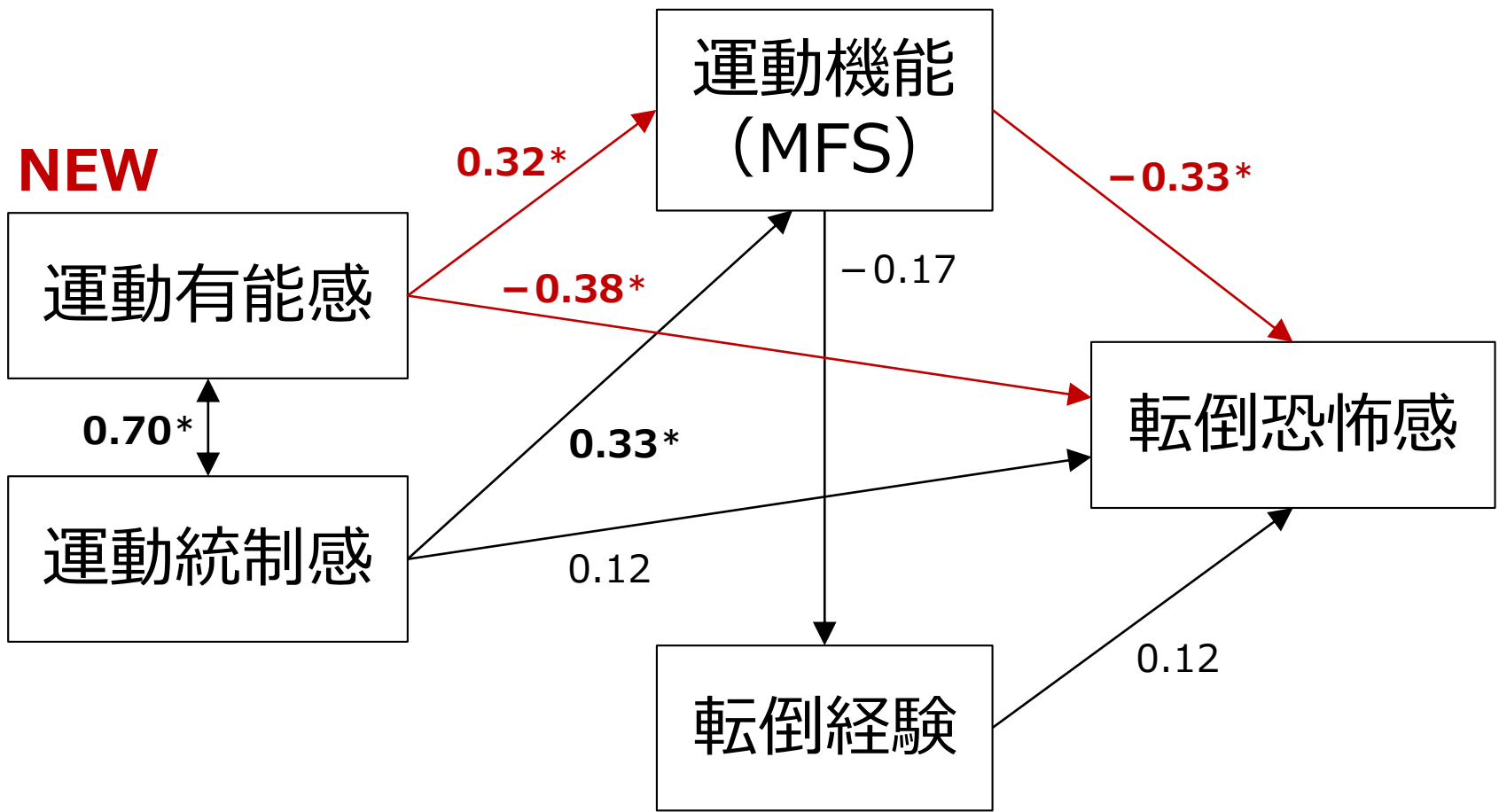
パス図の適合度は採択基準を満たしていた。
(GFI=0.995, AGFI=0.961, RMSEA=0.000)



転倒恐怖感に直接的に関連していたのは
運動有能感と**運動機能 (MFS)**であった。

運動有能感は運動機能に直接的に関連しており、
さらに運動機能を介して間接的にも転倒恐怖感
に関連していた。





GFI=0.995, AGFI=0.961, RMSEA=0.000, *p<0.05
 注：誤差変数 (e) は図の簡略化のためすべて省略した。

高齢者の転倒恐怖感とその関連要因の 新たな概念モデル

考察

- ▶ 転倒経験がない者が転倒恐怖感を来す背景には、自らが認識している運動に対する自信感（運動有能感や統制感）と実質的な運動機能の乖離が影響しているのではないかと考える。
- ▶ 転倒恐怖感の関連要因をパス図として包括的に提示できたことは成果であると考える。



今後の展望と課題

運動に対する自信や統制感という**内発的動機づけ**を促すことができれば、運動機能を高めるだけではなく、**転倒恐怖感を直接低減**または**改善できる可能性**が示唆された。

- ▶ フレイル高齢者に本研究のパス図が当てはまるのかどうか分からない。
- ▶ 剰余変数（未観測交絡）の存在が否定できない。



謝辞

本研究は、平成28年度学内研究費（一般研究）の助成を受けて行われた。

論文掲載（査読有） 誌名：総合リハビリテーション（印刷中）

「高齢者の転倒恐怖感とその関連要因の相互関係：パス解析を用いた検討」

今後の研究課題

科研費
K A K E N H I

平成28年～平成29年

若手研究B（課題番号：16K20834，研究代表者：小林 薫）

「健康長寿社会の実現に向けた世代間データに基づく転倒要因の新たな概念モデル作成」

